

# エジプト雑感

小林 軍治

3月7日から16日までエジプトへ行ってきました。近畿ツーリストの団体旅行ですが、何と40名もの人が参加していました。当日、関西空港で添乗員が「直前に何人かの方からキャンセルが入るかと思っていましたのに、全員参加で驚いています」と言っていました。

実は私もこの時期にも思ったのですが、2001年の2月にエジプト旅行に申し込みをしていて、6月に同時多発テロが発生し、さすがにその時はあきらめた経緯がありましたので、今回はチャンスがある時に行っておこうと思ったわけです。

イスラム圏に出かけたのは、中国の新疆ウイグル自治区、ウズベキスタン、トルコと経験はありましたが、本場の西アジアは初めてでした。たいした予備知識もなく訪れたわけですから、その国の雰囲気というか、人々の暮らしぶりをかいま見るだけでも驚きの連続でした。まず、ほとんどの女性がチャドルを身につけていました。先にあげた三国では、チャドルを身につけている女性を見つけると写真を撮っていましたから、いかに少なかつたかということですよ。

イスラム圏の国では、笑顔に出合うことが多くありました。こちらが東洋人であるということがいいのでしょうか。特に日本人であることがわかれば大変友好的な態度で接してくれました。今はどうでしょうか、イラク攻撃のあとでも日本人に対して今までのように友好的な感情を持っているのでしょうか。今回、エジプトで触れ合った人々は大変友好的でした。道を歩いていても、笑顔で「ウエルカム」と言ってくれます。こういう時期に観光旅行に来てくれた外国人に対しての気持なのでしょう。また、各観光地で小学生や高校生の団体によく遭遇しました。恥ずかしそうに、でも興味津々と我々を見ています。なかに積極的に英語で話しかけてくる子どもたちもいます。観光地で外国人にあつたら英語を使うように日ごろからいわれているようです。やはり、共通語は英語なんです。

観光客を連れて行くのは、名所・旧跡と相場は決まっていますので、今のカイロ、経済の中心地としての首都を見るチャンスはほとんどありません。空港またはホテルなどでその国の経済力を推し測るしかありませんが、一度だけ、ホテルの近くの市場（といっても7、8メートルの道の両側に地元の人が買い物をする店が雑多に並んでいるところで、我々が買いたい、また買える土産物があるわけではありません。）へ歩いていくチャンスがありました。そこへ行き着くまでが大変で、ウロウロしていると、若い男性が英語で「メイアイ、ヘルプユウ？」と声をかけてくれ、場所を教えてくださいました。7、8人で行ったのですが、珍しいのでしよう、周り中の人々が我々を眺めていました。その帰り道、1軒のパン屋さんでエジプトのパンを買おうとしていましたら、店の前に男の子が1人裸足で立っていて、店の人にパンを欲しいと言っているようでした。でもお金を持っていないようで、店の人にあちへ行くように追い払われていました。私はその時、食事の残りを袋に入れて猫か犬にやろうと持っていました。とてもその子に渡すことはできませんでした。最後の日の夕食で、屋外のレストランで食事をしたあと、たくさんのパンが余っていたので、お土産に2、3枚持って帰ろうとしているところをレストランの人に見つかってしまいました。レストランの人が笑いながら大きな袋に余ったパンを6枚入れて渡してくれ、断れなくて帰るはめになってしまいました。その帰り道、10歳ぐらいの男の子が数人、我々に花を売ろうとまとわりついてきました。これはチャンスと、その大きな袋を彼に渡すと、ビククリしながらも「シヨコラン（ありがとう）」と受け取ってくれました。

トルコでもウズベキスタンでも同じでしたが、学校は2部制になっていて午前の部と午後の部に分かれていて、その他の時間は子どもたちも立派な労働力として働いています。絨毯工場でも織手として働いていますので、我々日本人から見ると、こんな小さな子どもを働かせて児童虐待になるのではないかと思ってしまう。彼らは我々の気持を知っていて、写真のモデルを勤めてはしっかりチップを要求していました。

私たちのツアーのガイドはアブドルモネイム・アブゾイド〔略してアブド〕という30歳ぐらいの男性でした。我々がカイロにいる間は彼の会社の上司がいつもホテルに来て車の手配や何かと面倒をみてくれました。その上司の奥さんは日本人だそうです。また、8日間移動に使っていたバスの運転手は妻が2人いて、現在3人目を募集中だとのことでした。そして、移動した町々では必ずシークレットサービス（軍人のようです）が我々のバスに同乗してドアの前のシートに座っていましたし、バスを下りて歩く時にも同行していました。各観光地には肩に武器をかけた軍の兵士が必ずいます。アレクサンドリアのシークレットサービスが同行の若い日本人女性に頼まれて、上着の中につるしている機関銃のようなものを我々に見せてくれました。ピストルではなくて、かなり大きな銃でした。

ここからは、アブドの話ですが、「イスラム過激派の行動は今のエジプトでは支持されていない。観光収入で成り立っている国なので観光客の安全は守られている。エジプトの若者がつきたい職業は、医者・コンピューター関係の仕事、それと観光業に関係する仕事が人気です。教育が行き渡るようになり教育を受けられない人は少なくなってきた。しかし、政治についてはどうしようもない、ムバラク体制が今後も続く。シリアの大統領が変わったのをご存知ですか。前アサド大統領が突然亡くなったんだけど、憲法の規定に年齢制限があつて息子が大統領になれない。だから急遽憲法を変えたんです。そして息子が大統領になったんですよ。」

帰国してから調べてみました。確かに2000年の月にハーフェズ・アサド大統領が亡くなり、次男バッシャールに政権が委譲されていました。長男は事故死していました。ヨルダンの元首はフセイン国王、エジプトはムバラク大統領、イランは最高指導者ハネメイ師、クウェートはシャビル首長、それでも憲法を持ち選挙により議会が選ばれています。サウジアラビアはファハド国王による絶対王制です。議会は立法権をもたない諮問評議会だそうです。改めてイスラムの国々の現在の状況を考えさせられました。アメリカは民主主義という基準を何をもってはかるのでしょうか。

2003. 6

『岡山・十五年戦争資料センターニュース 夏季号』、  
No.16' 2003.6.25)